

裁判員教育の試行

Trial of Education to Nurture Qualities of *Saiban* - in

飯 考 行*、平 野 潔*、宮 崎 秀 一**

Takayuki II, Kiyoshi HIRANO, Shuichi MIYAZAKI

要 旨

裁判員教育（裁判員の資質を涵養する教育）を試行した弘前大学21世紀教育後期科目「市民生活と地域社会（Ⅰ）」講義について、その開講経緯と各回の概要を紹介し、主な受講生の意見と感想をスリッパとアンケート調査から分析し、裁判員教育のあり方を再考する。検討を通じて、裁判員教育の目的とする、裁判員裁判に対する実態に即した意見形成、裁判関連分野の学習と、学士力の向上は、同科目をもっておおむね達成できたものと評価される。他方、コミュニケーション・スキル、チームワーク、人間性、社会性の向上などの点は、改善の余地があることが示唆される。裁判員教育のあり方については、学外の裁判員制度に関する教育実践との比較と、関連する議論にかんがみて、模擬裁判シナリオ作成および上演の準備、裁判員制度の意義と問題点の情報提供ならびに課題喚起のほか、時間数の少なさや、教育運営体制の点などが、課題として残されていることを論じる。

キーワード：裁判員教育、法教育、学士力、模擬裁判、更生保護

はじめに

本稿は、裁判員教育を試行した弘前大学21世紀教育科目「市民生活と地域社会（Ⅰ）」講義概要を紹介するとともに、受講生の反応を各講義後の感想意見とアンケート結果にもとづいて検討し、裁判員教育のあり方に考察を加えることを目的とする。以下で、開講経緯（Ⅰ）、講義概要（Ⅱ）、受講生の反応（Ⅲ）、裁判員教育のあり方（Ⅳ）の順に論述を進めていく。

I 開講経緯

筆者（飯、平野、宮崎、以下同様）は、裁判員制度に関わる教育に、大学講義、サークル模擬裁判指導、裁判員裁判傍聴引率、高校等への出前模擬裁判を通じて取り組んできたところ¹、上記の裁判員教育により特化した講義を展開するべく、2011年度後期に「市民生活と地域社会（Ⅰ）」を開講した。

裁判員教育は、裁判員の資質を涵養する教育を意味する。その定義は、「裁判の原則と手続にもとづいて、公正に事実を認識し、不明な点を問い、討議の中で他者の主張を踏まえて自らの意見を述べ、全人格的な判断を行うとともに、市民として裁判と社会に参加する責任感を持ち、裁判員の職務に関わる

* 弘前大学人文学部
Faculty of Humanities, Hirosaki University

** 弘前大学教育学部
Faculty of Education, Hirosaki University

¹ 飯・宮崎・平野（2011）参照。

資質を育むための教育」である²。その特質は、裁判員制度の趣旨として裁判員に期待される健全な常識と公正・公平な判断にかんがみて、法的専門知識はもとより、市民の司法参加の意義を理解させ、法的リテラシー、すなわち公正に事実を認識し、自分の意見を明確に述べて他人の意見を公平に理解しようとする姿勢などの能力を身につけることにある。

裁判員教育の目的は、主に以下の三点に求められる。第一に、国民が裁判員就任をためらう主な理由に挙げられる漠然とした不安感や憶測を、可能な限り裁判員裁判の実情を知り直接的に体感することによって緩和することである。第二は、被告人の一生を左右する判断を行う裁判員の職責に、法律知識のみでなく、人格や責任感が関わるため、相応した裁判関連分野の教育機会を提供することである。第三は、裁判員の職務に伴う事実認定、質問、議論や公正な判断は、コミュニケーション・スキル、論理的思考力、チームワーク、倫理感、市民としての社会的責任など、学士力と共通する資質が多く³、大学教育の一環として学士力向上を裁判員教育で目指すことである。

筆者の裁判員教育の取り組みは、平成22年度教育改革プロジェクト・弘前大学GPの助成を得て、学士力向上の観点から裁判員教育のあり方に関する検討にいたった。続いて、単体としての裁判員教育構想が平成23年度弘前大学教育支援経費で採択されたことで実現したのが、21世紀教育テーマ科目「市民生活と地域社会（Ⅰ）」である。カリキュラム編成スケジュールの関係もあり、既存の「市民生活と地域社会」の枠内の扱いを選択し、「裁判員教育」と銘打つことはかなわなかったが、講義の中身は「市民生活と地域社会」に関わることから、穏当であったと言えよう。

同科目では、法廷で見聞した証拠にもとづいて、裁判員および裁判官の話し合いで、犯罪事実の有無を認定し、有罪の場合に刑の重さを決める裁判員裁判を、ディスカッション、裁判の原則と隣接分野、裁判員裁判の実情と、模擬裁判員裁判体験の4つのパートで学習し、学生の資質向上をはかることが構想された。そして、受講生有志で、大学、中学高校、公民館等で移動模擬裁判員裁判を上演し、成果を裁判員教育シンポジウムで検証することが念頭におかれた。同講義は、裁判員教育を実践に移行するために不可欠であり、21世紀教育科目の一環で行われることから、学部の枠を超えた受講生の登録が予想された。裁判員制度の施行後3年目の安定期に差し掛かり、これまでの裁判実績を踏まえて裁判員教育を実践しかつ検証する時期として、平成23年度の実施が最適であると考えられた。

期待できる成果としては、裁判員教育により、前述の学士力で重視されるコミュニケーション・スキル、チームワーク、倫理観、市民としての社会的責任などの大学生の資質向上があった。また、21世紀科目履修者が学内外で移動模擬裁判員裁判を上演することで、裁判員裁判を他の大学生と県民一般に教示し、仮想体験させて、大学生および弘前大学の地域貢献の役割も果たすことができると考えられた。弘前大学中期目標・中期計画の関連では、中期目標（I1（1））の「人間性及び社会性を涵養する教養教育と、社会の変化への対応能力を培う専門基礎とに重点を置いた教育を充実させる」と、社会との連携や社会貢献（I3（1））に関連する内容が目指された。

Ⅱ 講義概要

1. 編成

検討の結果、「市民生活と地域社会（Ⅰ）」は、構想段階のディスカッション、裁判の原則と隣接分野、裁判員裁判の実情の学習と、模擬裁判員裁判体験の4つの要素を、講義進行の日程等も勘案し、「裁判員裁判の概要に触れる」、「隣接領域を学ぶ」、「裁判員裁判を体感する」の3つの柱で編成した。

「裁判員裁判の概要に触れる」は、概説で、筆者のうち飯、平野により行われた。「隣接領域を学ぶ」

² 同上16頁参照（若干修文している）。

³ 中央教育審議会（2008）12-13頁参照。

は裁判員裁判に間接的に関係する、心理（被告人にかかる犯罪心理および裁判員の評議における心理）、受刑者の実情（懲役・禁錮刑を宣告された被告人のその後）、保護観察の実情（刑務所出所後の受刑者の更生保護、および保護観察付き執行猶予の実情）、ディスカッション方法論（評議での意見交換の手法）、正義論（裁判での判断に関わる正義の哲学的考察）を設定した。講師役は、それぞれ、教育学部教員、刑務所長、保護観察所長、教育学部教員、人文学部教員に依頼し、幸いにも全員から快諾を得られた。

「裁判員裁判を体感する」では、裁判員裁判の実情の講話に触れてイメージをふくらませた後、模擬裁判員裁判のテーマ（事件の具体的な内容）を受講生から募集し、年明けに選定した。そして、証人や被告人に対する検察官、弁護人の尋問、質問内容の加筆を含めて、シナリオに修正を重ね、上演にいたるプロセスを体験してもらうことで、裁判員裁判のなりたちを体感する機会を提供しようとした。

「裁判員裁判を体感する」では、まず、裁判員裁判の実情について、実際に青森地方裁判所の裁判員裁判で弁護人を務めた県内の弁護士による講話が構想されていたが、2010年末の死刑求刑無罪判決の出された裁判員裁判を傍聴した鹿兒島大学教員と接触する機会があり、協力いただけることとなった。弁護士も、年明けの模擬裁判員裁判のシナリオ作成時に講義に招聘し、裁判員裁判を含む刑事裁判の実情に関する小講話も行っていただいた。シナリオ作成は、学内サークルの大学祭時の模擬裁判指導を例年担当する平野と宮崎が主に指導し、平野作成のワークシート（資料1）にもとづく学生主体の作成が心がけられた。模擬裁判員裁判シナリオの完成と上演試行後は、講義とは別に、2012年2月に青森市内の高等学校、3月に十和田市内の中学校で、また同月に青森市の公共施設イベントホールで、受講生有志により公開上演することとした。

なお、実際の裁判員裁判の傍聴も講義に組み込むことを検討したが、公判は連日平日に行われ、後期科目のため夏季等の長期休学期間に恵まれず、弘前市から青森市の青森地方裁判所まで時間とお金を要し、受講生によっては講義を多く履修することから、実施は断念した。裁判員経験者や犯罪被害者による講話も、コマ数の不足と後者については知己のなさにより、今回は断念した。その代わりに、大学祭期間中に学内サークルで上演される模擬裁判員裁判の傍聴か、大学祭期間中に実施された裁判員裁判に関するシンポジウムの参観が推奨された⁴。両者とも都合のつかない学生には、2011年に青森地方裁判所で実施された裁判員裁判の概要を報道から分かる範囲で調べてまとめるレポート作成が課された。

2. 概要

シラバスには、学部や専攻を問わず、予備知識は特に必要ないが、講義を傾聴し、ディスカッションに積極的に参加し、模擬裁判員体験に積極的に関わる姿勢が求められる旨を記載した。裁判員制度に関する初の講義内容で、ディスカッションを交える旨をシラバスに記載したこともあり（受講生は概して減る）、受講者数をはかりかねたところ、20名の受講登録があった。多いとは言えない人数であるものの、新規科目で学生間に情報が行き渡っておらず、学生を含む市民の裁判員就任意欲は概して高いことに加えて、同時時間帯に開講された新任教員による民法科目に法学コースの学生が流れた事情も関わっていたと考えられる。結果的には、裁判員教育の試行に適当な人数であった。

登録者の内訳は、1年生16名、2年生1名、4年生3名で、1、2年生の所属は人文学部のほか医学部、教育学部、農学生命科学部と多岐にわたり、4年生は平野の刑法ゼミナール学生であった。男女別には、男子13名、女子7名となっていた。講義初回時に、裁判員就任意欲を挙手で尋ねたところ、積極的な意向を持つ者の割合が多かった。学外講演者の講義に際して、口頭質問は臆することなく割合多く出

⁴ シンポジウムは、「市民・裁判員の視点から見た裁判員裁判」と題して2011年10月に弘前大学で開催された。元裁判官の講演、筆者の報告、裁判員経験者の講話と、講演者・講話者に検察官、弁護士、別の裁判員経験者、新聞記者と学生を加えたパネルディスカッションの4部構成で行われた。パネルディスカッションの文字起こしは、弘前大学人文学部裁判法ゼミナール2011年度調査報告書に掲載されている。

され、毎回記入を求める感想や意見も考え抜かれた内容が多く、講義は比較的スムーズに進行した。各回の講義概要は、以下の通りである。

(1) 裁判員裁判の概要に触れる

①講義概要説明（10月7日）

オリエンテーションで、飯より、裁判員教育のテーマに関して、前述の定義、特質、着想のほか、講義目的が「裁判員にもし選ばれた際の心構えを身につけておくとともに、市民として裁判および社会に積極的に参加しうる資質を養うこと」にあると伝えられた。あわせて、裁判員制度に対する賛否等の意見を受講生に問わないことと、目標が、裁判員裁判のいわば練習にとどまるものではなく、裁判員の職務で社会生活に応用可能な資質を育成することにある旨が付言された。前者は、裁判員教育の着想の一点目に関わり、受講生が、裁判員裁判をできるだけ直接的に体感し、正確な情報を伝えた結果、裁判員制度に対してどのような意見を持つにいたるのかは、裁判員教育で関知するものではない。この回では、その他に、講義の進行予定、成績評価方法（平常点とレポート）と、参考文献が教示された。

②裁判員裁判の基礎（10月14日）

飯より、冒頭で裁判員制度の基本的な内容の問題が出され、裁判員裁判用の法廷、評議室の写真が映写され、無罪推定を含む刑事裁判の原則と訴訟手続の流れが概説された。また、裁判員制度の特徴が、対象事件、裁判員の職務（関与する場面）、義務や選任手続を中心に解説された。

なお、翌週は大学祭前日で休講日にあたったため、前述の通り、サークル模擬裁判傍聴、裁判員シンポジウム参観か、青森県内の裁判員裁判に関するレポート作成のいずれかを課した。

③青森県で行われた裁判員裁判（10月28日）

平野より、県内の裁判員裁判の実施状況、裁判員経験者（その時点で28号事件まで終了し225人が裁判員（補充裁判員を含む）を経験）、起訴罪名と論点と、法廷での裁判員からの被告人や証人に対する質問内容が紹介された。また、判決内容について、被告人31名すべてが有罪で、このうち16人について弁護人が執行猶予を求めたが、3名にしか猶予は付されず、すべて保護観察付きであったことが指摘された。判決については、従来の刑事裁判の量刑は「求刑の八掛け」と言われてきたが、青森県の裁判員裁判の判決の刑期を検察官の主張した刑期で割ったところ79.19%で、まさに「八掛け」であったことのほか、更生基盤に対する裁判員が強い関心を示した事例、上訴の状況や、今後の県内の裁判員裁判で審理予定の事件（責任能力が問題となる事件、完全否認事件、身近で起きた事件など）が紹介された。

④模擬裁判体験（11月4日）

平野の作成にかかるシナリオにもとづいて、模擬裁判を行った。事案は、介護疲れからの殺人であり、事実関係は争わず、量刑判断のみを争点に設定したものである。講義冒頭で、刑を決める上でのポイントを説明し、それから、受講者から裁判官役、被告人役などを募り、30分ほどその場で台本に沿って演技してもらった。この場面では、実際の裁判員裁判に近づけるために、あえて演技者以外には台本を配らず、証人、被告人の「生の声」に耳を傾けてもらっている。

シナリオ上演の後、6人ずつのグループに分かれて模擬評議を実施した。この評議では、まず被告人にとって有利な事情、不利な事情を挙げてもらい、それに基づいてグループごとに意見交換が行われた。続いて、具体的な量刑の作業に入ったが、事案自体が執行猶予を付してもおかしくはないと思われる事案だったため、執行猶予を付けるか否か、付けるとすれば懲役何年、執行猶予何年が妥当か、また、実刑にするとすれば、懲役何年にすべきかが話し合われた。少人数のグループディスカッションという形式を採用したせいか、どのグループも比較的活発な意見交換ができていたようである。

評議終了後、受講者に、評議の際にもっと欲しいと思った「情報」は何かを聞いてみたところ、執行猶予を付した場合の利点と欠点、被告人にどのような対応がされるのかといった、執行猶予制度の意義に関する情報、刑務所でどのくらい自由な時間があるのか、どれくらい辛いものなのかなどの刑務所で

の生活などに関する情報の不足を指摘する声があった。刑の量定を行うに当たってのこれらの情報の不足は、模擬裁判を行う前にも漠然と感じていたことであろうが、模擬評議を実際に経験することによって、より具体的に実感することができたと思われる。受講者には、ここで具体化された疑問を持って、次回以降の隣接領域の専門家によるレクチャーを聞いてもらうことになった。

(2) 隣接領域を学ぶ

①犯罪・非行の心理（11月11日）

教育学部の心理学担当教員（家庭裁判所調査官経験者）より、4つの問題、すなわち、「最近、殺人を犯す未成年者は増えている」、「非行少年に凶悪犯（殺人、放火、強姦、強盗）は結構な数がいる」、「犯罪や非行は行う人の個人的特徴による、時代背景によって異なる」、「強姦は見知らぬ他者によるものである」が提起され、イエスかノーかが問われた。すべて正解の学生はほとんどおらず、後のスリップの記載には予想と違って驚いたという感想が多く見られた。

講義は、問題の解答を含めて、犯罪・非行の推移と現状のデータにもとづく解説に始まり、犯罪・非行についての私たちの考え方の傾向（しろうと理論⁵）、犯罪・非行深度理論、その他の主要な犯罪・非行理論の順に進行した。学生の感想を読むと、「自分が裁判員になったときこの（犯罪心理の）知識があることでまったく違うと思いました」など、新鮮な視点に触れ、心理への関心を深めたようであった。

②受刑者の実情（11月18日）

11月18、25日は、刑務所、保護観察所のそれぞれの所長にご来校いただき、講演をお願いした。裁判員経験者に対する制度施行1年後のアンケートを見ても、経験者の6割が被告人の「その後」に関心を有しており、また、裁判員を務め終えた後、どのようなことに関心が高まったかという問いに関しても、「犯罪を増やさないための社会の取り組み」や「被告の刑務所での生活や更生の仕組み」への回答が比較的多い。このことから、被告人の「その後」を引き受ける刑務所と保護観察所に依頼し、お話をいただくことになった。この試みは、単に将来の裁判員に刑務所や保護観察所の「知識」を獲得してもらおうという趣旨ではなく、被告人の刑を決める際には、犯罪事実そのものだけでなく、被告人の「その後」も含めた「多角的な視点」が重要であることを体感してもらうことにある。

18日は、青森刑務所所長をお招きし、「裁判後の受刑者の実情」という講演をお願いした。当日聴講した18名のうち、刑務所見学経験者は3名のみであり、そのうち2名は10年以上前の見学経験者であった。事前のアンケートで刑務所のイメージを聞いたところ、「何となく暗いイメージ」「自由がない」「規則が厳しい」「寒い牢屋」「閉鎖的」という声が多かった。受講者のイメージとしては、かなりネガティブなイメージが多いようであった。

所長の講演は、30年間実務畑を歩いてこられた方らしく、具体的な経験を例に挙げながら進められた。大半の受講者が刑務所のことを知らないということを前提に、刑事施設の目的が犯罪者を社会から隔離することと同時に、適正な社会復帰を図り、二度と犯罪をさせないという点にあるという説明から入った。その後、全国の刑事施設の種類や数、被収容者数の推移、受刑者の分類や所内での生活、さらには、刑務所の予算がどの程度か、釈放後の生活に向けた職業指導などの内容にまで及んだ。また、今後の刑事施設の課題として、高齢受刑者対策や精神病患者への対応などが指摘された。

刑務所内での生活をほとんど知らない受講者にとっては、非常に新鮮な内容だったようである。

③保護観察の実情（11月25日）

青森保護観察所所長による「執行猶予中と出所後の保護観察の実情」と題する講演が行われた。

⁵ ファーナム（1992）参照。同書の第8章は「法律に関するしろうと理論」にあてられている。講義では、裁判員裁判の評議過程で、法律の「しろうと」である裁判員の心理が影響を及ぼす可能性にも言及された。

当日の受講者17名に事前アンケートをしたところ、17名中15名が保護観察という制度について「あまり知らない」「知らない」と回答しており、残り2名も「ある程度知っている」という程度であり、「知っている」と答えた者はいなかった。刑務所以上に認知度は低いようである。保護観察の内容に関しても、一部は「更生を見守る」「社会に同化させる」という本質的な部分を理解しているものもあったが、大半は「出所者を監視する」「執行猶予中に悪さをしないか観察する」「問題行動を犯さないか見張る」という漠然としたものとして捉えられていたようである。

所長は、まず、「更生」は一字にすると「甦る」となることから、更生とは「いきかえる」「うまれかわる」ことであり、「反省して心を入れ替える」ことであるという言葉の意味から講演を始められた。この冒頭の説明は、受講者にとってはかなりインパクトがあったようである。後の感想でも「深いなあと感じた」と書いていた学生がいた。その後、刑罰や更生保護の歴史に、とくに青森県における更生保護施設の歴史を説明された。さらに、更生保護制度の概要の説明の後、具体的な事例を挙げながら、保護観察がどのように実施されているのかが示された。最後に保護観察の課題として、とくに再犯防止に向けた対策の重要性が指摘された。この再犯防止に関しては、前週の刑務所長の講演でも指摘されており、最重要課題であることが学生にも強く印象づけられたようである。

④ディスカッション方法論（12月2日）

授業前半は、ディベート的思考が裁判員の判断力向上とどう関わるかについて、法教育の観点から⁶、宮崎が私見を述べた。

最初に実際のテーマ例として、受講者年齢にふさわしく「18歳成年制」への賛否について一緒に考えてみた。民法、少年法、未成年者飲酒禁止法、同喫煙禁止法等、現在20歳を成年とする法制度が多い中で、「公職選挙法上の選挙権を18歳に引き下げる」ことについて、意見を問うと、およそ賛否相半ばした。ディスカッションはそのまま自己の見解の正当性を論じてよいのに対し、ディベートはくじで指定される立場に立って相手側の主張を論駁する一種の知的ゲームであることを確認する。実際に試行すると、自身の「本音」に反した主張をする難しさを体験する反面、反対側の視点に立つことで従来気づかなかった論点が浮かび上がることも実感できたはずである。

刑事裁判では検察側と弁護側とが事実関係と法の解釈適用に関して相対立する立場から主張を展開する。いずれも個人の立場・評価を離れ法廷では職業上の使命に即した主張が要請されるという意味において、刑事裁判はディベート原理に基礎を置いているといえることができる。そして裁判官と裁判員はこれら両当事者のいずれの立論と証明がより説得的であるかを見極める、ディベートの勝敗を判定するジャッジの位置に立つ。

後半は、社会科教育法が専門の教育学部教員が、ディベートのルールと立論の仕方について、「原子力発電所を廃止すべきである」のテーマを例に解説した。

ディベートでは、与えられた命題について、肯定側と否定側に別れて立論の説得性の優劣を争うが、それぞれの立論には戦略的技法がある。肯定側は命題に即した政策（プラン）に現状では得られないメリットがあることを強調する「比較優位法」、現状の深刻な問題状況を当該政策により解決できるとする「問題解決法」、否定側の立論は、現状には問題がなく、肯定側の用いる論拠やプランの実現可能性と問題解決性を否定する「否認法」、現状の利点を押しだして小幅の修正で問題解決可能とする「立論法」、現状の問題は認めつつ、肯定側とは異なるプランを提示する「対抗プラン法」がある。

これら特定の政策（プラン）の是非を論ずる技法が個別事件における裁判にストレートに適用できる訳はないが、量刑をめぐる検察・弁護双方で激しい攻防が展開され、評議において裁判官および裁判員が判断を迫られるケースにはこれと通ずる面があるように感じる。例えば、当該事件について、死刑

⁶ 以前から、中学校社会科、高校公民科（現代社会、政治経済）の教科書では、死刑の存廃、夫婦別姓導入、地球温暖化防止条約など国内外の諸問題をテーマに、ディベートを授業で取り上げることが推奨している。

か無期懲役か、または実刑とするか執行猶予をつけるかで鋭く意見が対立したような場合、検察側の論告・求刑、弁護側の最終弁論の構成についてはディベートにおける上記立論技法は参考になるのではなかろうか。

⑤正義論（12月9日）

人文学部の哲学担当教員より、「正義」の文字のなりたちや、正義の女神の目隠しと秤についての写真を交えての説明に始まり、ギリシア、ローマから現代にいたる「正義」と「善」に関する議論の系譜が紹介された。受講生の記したスリップでは、「正義」を深く考える機会があまりなかったので有益だった、という感想が多かった。

（3）裁判員裁判を体感する

①裁判員裁判の実例（12月16日）

鹿児島大学の憲法担当教員より、2010年末に鹿児島地方裁判所で死刑求刑無罪判決が出された裁判員裁判の事例が、傍聴メモにもとづいて詳細に報告された。捜査のあり方やメディアでの報じられ方など、事例をもとに語られ、受講生は報道されない法廷で出された証拠のみにもとづいて事実を認定することの重要性を認識したようであった。講義後も別室に移り、熱心な受講生の質疑に応じていただいた。

②模擬裁判シナリオ案の持ち寄り（1月6日）

年明け以降は、これまでの隣接領域からのレクチャーを踏まえて、模擬裁判のシナリオ作成を行った。このシナリオ作成作業の中では、とくにディベートの技法を参考にしながら、検察側・弁護側双方の主張を考えることになる。また、量刑に関する事実を考える上では、犯罪事実そのものの重大性や被告人の裁判後の姿を考えなければならない。これまでの隣接領域の各専門家からのレクチャーが大きな意味を持つことになる。

シナリオ作成の布石として、前回（12月16日）の授業の際、ワークシートとシナリオ作成の資料を配付しておいた。作成資料は、まったく手掛かりなくシナリオ作成をすることは難しいので、参考として一つのシナリオ作成手順を示した。また、ワークシートは、事件名や模擬裁判を通じて訴えたいこと、事件のあらましを記入してもらうものである。ちょうど年末年始の休業が間に入るため、シナリオの叩き台となるものを考えるには十分な時間がとれた。

授業では、書いてきてもらった事件の概要を印刷して全員に配付し、その上で一人一人に各自が考えてきたシナリオの内容、ポイントをプレゼンテーションしてもらった。危険運転致死事案や自殺サイト囑託殺人、児童虐待、介護殺人など、それぞれシナリオとしては興味深いものであったが、全員による投票を行った結果、「復讐殺人事件」がシナリオの原案として採用された。事実の概要は、以下の通りである。

2011年9月23日、青森市内のある倉庫で25歳の男性3人の刺殺体が発見される。3人とも両手・両足を縛られ、頭に殴られたような跡があった。そして1週間後、46歳の男が逮捕された。男は全面的に犯行を認め、現場からも男の指紋等が見つかり、犯人であることが確定した。犯行の経緯は、9月20日夜、被害者3人が一緒にいたところをバットで襲い、車に乗せ拉致、1日の監禁の後、ナイフで3人を刺殺したというものだった。そして、犯行の動機が考慮すべきものか議論になった。

10年前、被害者3人は当時中学3年生であり、万引きを繰り返したり、ひったくりをしたりと素行が非常に悪かった。当時、被告人は、同い年の妻と14歳だった娘と3人暮らしであった。その年の8月3日夜、被害者3人は被告人方に忍び込み、窃盗をしようとした。しかし、物音に気づいた娘が発見された。3人は娘を乱暴し、首を絞めて殺害。さらに寝室で寝ていた母も首を絞めて殺害し、金品を奪って逃走した。被告人はその夜、会社の同僚と飲みに行って留守であり、帰宅して事件が発覚した。その後すぐに3人は逮捕されたが、未成年であったため少年院に送られ、7年で外に出た。

妻と娘を殺害された悲しみは深く、会社は辞め、家に引きこもる毎日となった。毎日が絶望であり、さらに妻の親族

から「お前があの日家にいれば死なずに済んだ」と言われ、ボロボロであった。唯一妹だけ男性の世話をしてくれて、少しずつ回復していった。そして、8年後、仕事には一応就いて暮らしていた。

その2年後、出院した3人が親に伴われ被告人の家に来た。しかし、決して謝るわけではなく、金で何とかしようとするだけで、一切反省はなかった。さらに、3人のうち1人は出院後、再び傷害事件を起こしていた。

反省もせずのうのうと生活している3人に怒った被告人は、同年9月20日、3人を拉致監禁し、その後殺害した。逮捕後、被告人は、「もう遣り残すことはない。早く死刑にでもしてくれ」と述べている。

原案を作成した学生によれば、「殺害した人数から考えれば『死刑』が妥当であると考えられるが、犯行に至った動機を考えたとき、果たして本当に『死刑』が妥当なのか」という点を考えて欲しいということであった。

若干の質疑応答をしながら、設定に無理がないか、誰を証人として呼び、どのような証言をさせるかなどを話し合い。その結果、以下のように一部内容を加筆・修正することとなった。

- ・証人は、検察側証人として被害者の雇用主、弁護側証人として目撃者（共犯者）、被告人の妹を呼ぶ。
- ・雇用主は、被害者を少年刑務所出所後雇用しており、被害者たちは職場では立ち直りを見せていた。
- ・目撃者（共犯者）は、被告人と被害者の最後のやり取りを聞いていたが、被害者たちは最後まで反省していなかった。
- ・被告人の妹は、以前の事件で人生に絶望した被告人が社会に復帰するまでの被告人の苦勞を知っている。

以上の内容を踏まえて、次回の授業では、主として証人尋問、被告人質問の内容検討を行うことになった。受講者には、それまでに3人の証人および被告人に対する検察側・弁護側の質問を考えてくることが課題として示された。

③模擬裁判シナリオ作成（1月20日）

冒頭で現在決まっていない事項の確認をし、証人尋問および被告人質問の前提となる、検察側・弁護側双方が考える「刑を決める上で考慮してもらいたい事情」を受講者全員で考えた。これを決めることで、検察側・弁護側双方の主張内容が決まり、それが証人尋問・被告人質問に影響を与えることになるからである。決定した事項は、以下の通りである。

《検察側》

1. 反省していない。
2. 計画性がある。
3. 監禁した上での殺害（悪質性）
4. 3人を殺している（結果の重大性）

《弁護側》

1. 動機に情状の余地がある。
2. 更生基盤が整っている（妹の存在）

これに基づいて、授業後半は、グループワークを行った。具体的には、「雇用主グループ」「目撃者グループ」「妹グループ」「被告人グループ」の4つのグループに分かれて、それぞれの場面での検察側・弁護側の質問とそれぞれの証人・被告人の回答を作り上げる作業をしてもらった。

④模擬裁判シナリオ作成（1月27日）

弘前市内で開業する弁護士に來校いただき、これまでのシナリオについて専門家の見地からコメントをいただいた。

まず、冒頭で、青森県内の弁護士の状況、青森2例目の裁判員裁判を経験されての感想、そして弁護士の役割をご説明いただいた。その上で、現在のシナリオに関して、以下の3点のご指摘があった。

- ・被害者の雇用主を呼ぶことで、検察官に何を立証させようとしているのかが不明確である。
- ・妻子が殺害された事件との期間が長い。通常であれば近ければ近いほど恨みが強く、徐々に薄らいで

いくものである。この設定であれば、被告人の内面をどう捉えていくかを検討する必要がある。

・社会復帰させるためにどうするか、という視点も重要である。

その後、弁護士にアドバイスを頂きながら、当初の目標にあったように、「動機を考慮した場合、本当に死刑を科することが相当なのか」を考えてもらうようにするには、どのようにシナリオを修正すべきかの意見交換が行われた。その結果、以下のような修正案が提示された。

- ・被害者が3人では多すぎるので、2人としてはどうか。また、雇用主に関しては、そのうちの1人を雇っていることにしてはどうか。
- ・凶器に関しては、ナイフを事前に準備したのではなく、その場に落ちていた鉄パイプをカッとなって使ってしまったことにしてはどうか。その犯行態様は、頭を力いっぱい2～3回殴るというものではどうか。
- ・被告人は「死刑になってもいい」とは思っておらず、現在は反省していることにしてはどうか。さらに妹とやり直す意向を示しているとするのはどうか。
- ・計画段階では殺害まで意図していた訳ではなく、ただ被害者らの話を聞いて反省を促すつもりだったことにしてはどうか。
- ・被告人は自首をしたことにしてはどうか。

さらに、弁護士から、被害者の傷害事件の内容をどうするか、妹との関係、すなわち一緒に住んでいるのか、年に数回顔を合わせる程度なのかという点も検討する余地があるのではないかという指摘があった。これらの修正案を各自が持ち帰り、次回までにどのような内容にするかを再検討してくることが課題として示された。

最後に、弁護士より、シナリオには出てきていないが、被害者の遺族の気持ちをどのように示すかも重要である点が指摘された。

⑤模擬裁判シナリオ作成と上演（2月3日）

前回講義以降に学生から電子メールを通じて寄せられた修正意見と、講義時のディスカッションにもとづいて、シナリオが修正され、読み合わせを兼ねた上演の試行を経て、シナリオがほぼ完成した⁷。

Ⅲ 受講生の反応

1. 被告人の処遇への関心

刑務所長の講演後、受講者に感想を記入してもらっている。すでに感想の一部を記載してきたが、ここでは、とりわけ強い関心が示された被告人の処遇をとり上げる。

まず、『「暗い」』『くさい飯』のイメージが強かったが、そのイメージが変わった」という感想や、「刑務所での生活はもっと息苦しいものであると思っていましたが、意外にも快適な暮らしが出来ているようで驚きました」という最初に持っていたイメージと違ったという感想が非常に多かった。一方で、このイメージの違いが刑務所に対する別の見方も引き出しているようである。「テレビ見たり出来ることに関しては、少し甘すぎるのではないかとも思った」「刑務所の規則正しい生活は、出所後のことを考えると、甘やかしているとまでは言わないが、本当に受刑者にとって良いことなのか疑問に思った」「想像していたよりも少し緩いような生活なのではないかと感じた」「世の中には布団もなく食べるものもなく、生活に大変困っている人々もいるのに、犯罪を犯してしまった人がテレビを見たりするのはおかしいのではないか」という、思ったよりも「快適な」刑務所での生活に対する疑問である。ただ、そう言いながらも、これらの感想を述べた者も「真剣に更生しようと努力している人もいるので、そのような人のことを考えると今のままでいいのかなと思った」とある種の葛藤を感じているようであった。こ

⁷ シナリオ完成版を資料添付したいところであるが、原稿提出期限に間に合わないため収録を割愛する。

のような葛藤は、本当の刑務所の姿を知らなければ出てこないものである。この点では、今回の講演を通じて新たな視点の獲得に成功した受講者が多かったようである。

次に刑務所の位置づけに関してであるが、受講者からは、「これまでは裁判で判決を下す過程までのことしかほとんど考えていなかった」「裁判の流れには興味があり、勉強していたが、その後、被告人はどういう扱いを受けるのかということは、考えたこともなかった」という感想が聞かれた。裁判員制度の施行によって裁判そのものへの関心が高まりつつあるが、裁判員経験者を除けば一般的には、やはり被告人の「その後」に関しては、まだまだ関心が薄いのが現状であろう。その意味では、「その後」に関心を向けることが出来るようになった受講者がいたことは、十分に教育目的を果たしたと言い得るのではないだろうか。

さらに裁判員制度に引き寄せて、「裁判員裁判では、刑務所に入るかどうかなどを直接決めるので、今回の話を聞いてもっとそう言った刑務所での生活など他にもいろいろなことを考えて量刑を決めたい」、「やはり自分の目で見て、聞いて、体験して、経験を重ねているからこそ、人間が人間をよりよい方向に裁くことができるのではないかと感じてしまった。しかし、裁判員制度が行われている今、知識・経験の少なさをどうカバーするかは大きな問題であると感じた」という感想も聞かれた。「裁判員教育」という本講義の目的から考えた場合、このように裁判員制度との関係を考えながら、そして自分が裁判員に選ばれた場合のことを考えながら取り組んでいる受講者がいることは、ある程度教育目的が果せていることの証左であろう。

受講者からは、「受刑者も1人の人間であることを、私はやや忘れていた」「彼らもやっぱり普通の人間なのだと感じた」という感想も聞かれた。犯罪者を異質のものとしてみるのではなく、同じ人間としてみるという視点がそこにある。いわゆる「厳罰化」が進んでいる現代の社会においては、ある意味犯罪者は異質な存在として語られる傾向がある。そのような傾向がある中で、このような感想が聞かれたことは、大きな意味を持つように思われる。

これらの感想からは、受講者が実際に刑務所見学をしたわけではないが、もっとも受刑者に近いところにいる方の話を聞いて、よりリアリティを持って被告人の「その後」を、そして「受刑者」そのものを見ることができ、それを判断の一要素と捉えることが出来るようになったのではないかと思われる。

保護観察所長の講演の後にも、同様のアンケートを実施している。ここでは、前回の刑務所長講演後のアンケートとの比較をしながら、分析を試みたい。

保護観察所については、「刑務所同様に今まで興味を示すことのないところだった」という感想も一部にはあったが、総じて受講者にとっては刑務所よりも遠い存在だったらしく、「保護観察という言葉にはあまりなじみがなかった」「保護観察のことは何も知らなかったし、今まで興味も湧かなかった」という感想が多かった。この講義を通じて初めて保護観察という制度を知り、興味を抱いた受講者が多かったようである。「保護観察の様子を見たい」「できれば実際に保護観察の処分を受けて、今は普通に生活を送っている、あるいはまた犯罪を繰り返してしまった人の話を聞きたい」という意見もあった。今回の講義で、保護観察の理解が進んだのはもちろんであるが、さらにその先への興味・関心が生じていることが見て取れる。

また、ある程度保護観察の理解があるものにとっても、認識を改める機会となったようである。そのことは、「保護観察は大変軽いものだと思っていた。…しかし、この講義を通じて保護観察処分というものを見た際に、受刑者に対しても、それを管理する国に対しても『重い』ものなのだと感じた」という感想に表れている。これは、保護観察の具体的な方法や遵守事項、あるいは不良措置などの説明を受けたことで、保護観察処分の内容がより具体化したためと思われる。この点は、刑務所に関しても同じような感想があった。「受刑者の人の毎日のスケジュールは、とてもきちんとしたものだと思います。けれど、自分はそういうスケジュールですごしていないし、多くの人もそうだと思います。その中で365日毎日このスケジュールを強制されるのだと思うと、やはり懲役というのは重い刑罰だと思います」

た」という感想も、やはり刑務所の現実を知り、それを自分に重ね合わせた時に、初めてその重さを実感できたものと思われる。

保護観察に関する所長の講演を受けて、やはり裁判員制度に引き寄せた意見もあった。「裁判員制度では、懲役刑にする以外に保護観察処分にすることもあるだろうし、これからそういった事を考える上では、今日学んだことを考慮に入れていきたいと思った」というのが、それである。ここでも、刑務所の場合と同様、一定の範囲で教育目的の一つは達成できているように思われる。

11月18、25日の講義は、前述したように被告人の「その後」を考えてもらうための講演であった。この2回を通じて、両所長とも、再犯の問題を取り上げておられた。受講者にもそのことがとくに印象的だったらしく、「刑務所の中でも様々な努力があることを前回の講義で学んだが、保護観察中もいろいろな人の助けを借りて就職を目指すことで、再犯防止につながることをあらためて感じた」「再犯率とは、刑務所や保護観察所の人々だけの問題なのだろうか。一度犯罪を犯した人を快く受け入れることというのは難しいと思う。しかし、一度ドロップアウトしてしまった人間を立ち直らせるには、その人間が生きていく『社会』が寛容にならなければならないのではないかと考えさせられた」「今日の講話を通じて一番感じたことは、自分が裁判員という立場に立った時、仮釈放につながるような判決を軽く考えてはいけないということだ。人情があるので反省している様子をくみると、悩んだ挙句そのような判決に導いてしまうかもしれないが、犯罪を犯した人が社会に戻って更生する大変さ、逆をいうと刑務所の中での更生の重要さというところもきちんとその人を見て判断しなければ、下手をすると再犯につながりかねないような気がした」というように、「再犯防止」という新たなファクターを獲得できた点は、受講者にとっては大きな成長なのではないだろうか。

2. 受講生アンケート

2012年1月27日の講義終了時に、講義目的の達成度をはかる一助として、アンケート調査を実施した（資料2、3）。7問に無記名式で選択肢5つから回答を求めた。対象者は当日出席の16名全員である。以下で、選択肢のうち積極意見（そう思う・どちらかといえばそう思う）と消極意見（どちらかといえばそう思わない・そう思わない）を中心に、回答傾向から講義目的（第一は裁判員裁判の実態に即した意見形成、第二は裁判関連分野の学習、第三は学士力の向上）の達成度を検証する。

問1の「裁判員をつとめたいと思うようになった」については、積極意見が12名に（75.1%）、消極意見が2名に見られた（12.6%）。裁判員就任意欲の向上は講義目的に含まれていないが、積極意見の方が多い結果となった。講義を通じて裁判員裁判の関連領域を学び仮想体験したことで、実態に即して受講者が意見形成を行ったのであれば、裁判員教育の第一の目的は達成されたものと言えよう。

問2の「裁判員に選ばれると負担が大きいと思うようになった」では、積極意見が11名（68.8%）、消極意見が2名（12.5%）で、問1の回答内容との相関は見られない。受講を通じて、就任意向を問わず、判断の重責を感じたのであれば、裁判員教育の第一の目的にかなうことになる。

問3の「正義とは何かを考えるようになった」は、積極意見13名（81.3%）、消極意見1名（6.3%）であった。講義で扱われた「正義論」、鹿児島地裁の裁判員裁判の実例や、模擬裁判員裁判のシナリオ作りを通じて、受講生が裁判の関連領域に考えをめぐらせたことは、裁判員教育の第二の目的に沿う。

問4の「被告人の処遇について考えるようになった」は、積極意見のみ（100%）であった。刑務所長と保護観察所長の講話の影響を受けて、被告人の処遇への関心が高まったことを表している。この点も教育目的の第二にかなう。

問5の「他人とのチームワークの中でコミュニケーションがとれるようになった」は、積極意見11名（56.3%）、消極意見2名（12.5%）であった。「どちらともいえない」は設問中最多の5名（31.3%）であった。教育目的の第3はおおむね達成されたと言えよう。受講生間の意見交換の機会は、第4回の模擬裁判体験と、後半のシナリオ作成協議に過ぎなかったため、より時間を配分することで、積極意見の

比率は高まったと推察される。

問6の「自分の言動に社会的責任を感じるようになった」に対しては、積極意見13名（81.3%）、消極意見1名（6.3%）で、8割強が肯定的回答となった。講義を通じて裁判員のつとめの重責を感じたことがうかがわれ、教育目的の第1および3はほぼ達成されたと評価される。

問7の「自分の人間性、社会性が向上したとを感じるようになった」では、積極意見が11名（68.8%）、消極意見が2名（12.6%）から出された。教育目的の第3はおおむね達成できたと言えるが、講義の内容の改善をはかっても、半期のコマの制約の中で積極解答の比率を高めることには制約があろう。

Ⅳ 裁判員教育のあり方

2011年度後期「市民生活と地域社会（Ⅰ）」の概要と受講生の反応をまとめてきた。全国的にも独自性を持つ教育内容であったものと思われるが、本章では、学外の裁判員制度に関する様々な教育実践に照らして、筆者の試行した裁判員教育を位置づけて、そのあり方を再考したい。

裁判員制度の制度紹介や模擬評議は、裁判所と検察庁で行われているほか、大学サークルや、学習指導要領改訂に伴い小中高校でも取り組まれつつある。

裁判員制度に関する教育実践が数多ある中で、模擬裁判のシナリオ作成、上演を含む教育実践に、井門の取り組みがある⁸。井門の所属する秋田大学教育文化学部の前期科目「公民科教育学概論」および後期科目「公民科内容学」では、2008年度に、裁判傍聴、弁護士および検察官の講話を経て、指導教員、検察官と弁護士のコメントを受けながら、受講生が模擬裁判員裁判のシナリオを作成し、上演を行った。一年間の長期にわたり、事前事後の準備や実務家の関与の度合いの点で、模擬裁判は弘前大学の取り組みを上回る内容であり、学ぶべき点が多い。

秋田大学の上記講義の目的は、知識と行為の統一をはかり社会的実践力の育成をはかる役割体験学習論にもとづいて、裁判員制度に関する知識・理解の上に立ち、実際に裁判員模擬裁判を体験することにおかれ、学生自らが学習体験を活かして学校で裁判員裁判の授業実践ができるように教育的観点で計画されていた。その目的は、裁判員裁判を素材とした役割体験学習論の試行にあるように映る。

他方、本稿で紹介分析した弘前大学後期科目「市民生活と地域社会（Ⅰ）」の目的は、裁判員裁判の含意に着目した、裁判員裁判に対する実態に即した意見形成、裁判関連分野の学習と、学士力の向上におかれ、裁判員裁判の実情に迫ろうとする点で秋田大学の授業実践と共通性は有しながらも、裁判員裁判を素材とした人格面の向上を含む広義の法教育の試行にある点に、違いがあるように思われる。

裁判員教育では、裁判員制度が国家政策として導入された点に関わって、教育スタンスも問われる。渡邊は⁹、学習指導要領改訂と前後して公表された「国民の司法参加」「裁判員制度」に関する授業プラン・授業記録を分析し、散見される特徴と問題点として、裁判員制度に「民主主義的」意義付けを行う傾向があること、裁判員として制度に参加することを称揚（ないしは褒め）する傾向があることと、裁判員制度そのものの是非を問う視点を持った授業プラン・授業記録が非常に少ないことを指摘する。そして、裁判員制度の意義と問題点の両者について、教師は児童・生徒に情報提供し、課題意識を喚起する必要を、国民の司法参加や裁判員制度を学校の授業で取り上げる際の留意点として挙げる。

この渡邊の指摘と主張は、裁判員教育の上で肝に銘じなければならない。筆者は裁判員制度に対して何らかの意義を見出しているものの¹⁰、全面的賛成論者でも反対論者でもなく、裁判員教育および「市民生活と地域社会（Ⅰ）」で裁判員就任の称揚を目的としていないことは前述の通りである。ただし、

⁸ 井門（2011）38-90頁参照。

⁹ 渡邊（2011）参照。

¹⁰ 例えば、飯（2010）は、裁判員裁判の傍聴体験や被告人の弁などから、裁判員のもたらしうる更生、治癒効果を試論する。

同講義では、裁判員制度の意義と問題点には簡単にしか言及しなかった。その理由は、同科目が教養科目かつ半期科目であることと、裁判員制度の意義と問題点を論じる前提として、裁判の原則と刑事訴訟手続の概要の理解がないと難しいと判断したためである¹¹。また、同科目は、国民が裁判員に毎年くじで選ばれうる現状を前提としており、裁判関連分野の学習と学士力向上の点では少なくとも裁判員制度に意義を見出しているため、全面的な制度反対論に立つと科目自体が成り立たなくなる面もある。裁判員制度の意義と問題点については、導入としての簡潔な教示と問題意識の喚起ができるよう工夫したい。

その他の裁判員教育のあり方に関する検討事項は、秋田大学の実践例からも、半期科目では物理的に時間が十分でないため、通年科目化するか、他の科目との連携と整合性をとることである。「市民生活と地域社会（Ⅰ）」では、実際に、履修条件ではないものの、同科目との関連づけを意識した前期科目「法学の基礎①」（平野担当）の履修を推奨していた。また、2011年度の試行では結果的に少人数制で授業を展開できたが、次年度以降も継続する場合に受講生が増えた場合に、とりわけ模擬裁判員裁判シナリオの作成指導に現スタッフの人員で対応可能かどうかは検討を要する。法廷傍聴の引率、学外講師や法律実務家の協力の可否を含めて、教育運営体制は引き続いて課題であると言える。

おわりに

本稿では、弘前大学で2011年度後期に開講した21世紀教育科目「市民生活と地域社会（Ⅰ）」について、同講義の開設経緯を含む概要を紹介し、受講生の反応を講義スリップとアンケート調査結果にもとづいて検討するとともに、裁判員教育のあり方について考察を加えた。

以上から、裁判員教育の目的とする、裁判員裁判に対する実態に即した意見形成、裁判関連分野の学習と、学士力の向上について、開講科目をもっておおむね達成できたと評価される。他方、コミュニケーション・スキル、チームワーク、人間性、社会性の向上などの点は、改善の余地があることが示唆された。裁判員教育のあり方についても、学外の裁判員制度に関する教育実践との比較と、関連する議論にかんがみて、模擬裁判シナリオ作成および上演の準備、裁判員制度の意義と問題点の情報提供ならびに課題喚起、時間数の少なさや、教育運営体制が、課題として残された。

筆者は、2011年度の試行を踏まえて、今後も裁判員教育を継続し、改善に努めることを予定している。裁判員制度に関する研究と両輪をなすものとして¹²、裁判員教育の可能性を追求していきたい。

＊本稿は、平成23年度弘前大学教育支援経費「裁判員教育から創る！学士力と社会貢献能力－21世紀教育での実践と展開」による成果の一部である。執筆は、平野が、Ⅱ（2）②③、（3）②③④およびⅢ 1 を、宮崎がⅡ（2）④を、飯がその他の部分を、それぞれ主に担当した。

文 献

- 飯考行（2010）「裁判員裁判の更生、治癒効果に関する試論」人文社会論叢（社会科学篇）24号133-151頁。
 ———・宮崎秀一・平野潔（2011）「裁判員教育の構想－弘前大学における実践から」21世紀教育フォーラム 6 号13-29頁。
 井門正美（2011）『役割体験学習論に基づく法教育－裁判員裁判を体感する授業』現代人文社。
 中央教育審議会（2008）「学士課程教育の構築に向けて」。

¹¹ 弘前大学では、別に、人文学部の2年生以上配当の飯担当の前期科目「裁判法Ⅰ」で裁判の原則と民事・刑事訴訟手続を概説し、後期科目「裁判法Ⅱ」の一部で市民の司法参加のテーマを扱い、裁判員制度の意義と問題点を扱っている。

¹² 筆者は、研究の視点から、別に、平成23-25年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「市民・裁判員の視点から見た裁判員裁判の検証」のテーマで、法廷モニタリング、裁判員経験者インタビュー、評議実験などに取り組んでいる。

土井真一（2009）「法教育の基本理念－自由で公正な社会の担い手の育成」大村敦志＝土井真一編著『法教育のめざすもの－その実践に向けて』商事法務3-28頁。

ファーマム，A.F.（細江達郎監訳、田名場忍・田名場美雪訳）（1992）『しろうと理論－日常性の社会心理学』北大路書房。

渡邊弘（2011）「『国民の司法参加』『裁判員制度』の教育をめぐる課題」憲法理論研究会編『政治変動と憲法理論』敬文堂153-165頁。

資料 1

模擬裁判シナリオ作成ワークシート

2012年 1 月20日

1. シナリオの「叩き台」

(1)原案（略、本文参照）

ワーク 1

もう一度原案を検討してみよう。設定に無理なところはないか確認してみよう。

- ・ 監禁の態様に無理はないか？
- ・ 3 人を殺害した順番はどうするか？その場合、殺害されるところを他の被害者が見ていたという設定にするのか？
- ・ 共犯者の関与はどこまでにするのか？

(2)登場人物

被告人

証人：（検察側）被害者の雇用主

（弁護側）目撃者（共犯）、被告人の妹

ワーク 2

- ・ 被告人の名前を決めよう。
- ・ 雇用主の名前、事業内容を決めよう。
- ・ 目撃者（共犯）の名前、被告人との関係を決めよう。

ワーク 3

証人は、この 3 人でいいだろうか？

- ・ 目撃者は、「共犯者」とされているが、それでいいか？
- ・ 被害者の「雇用主」は、3 人を一緒に雇っているという設定にするか？そのうちの 1 人（例えば少年事件の首謀者）の雇用主とするか？

2. 冒頭手続き

(1)人定質問

ワーク 4

被告人の生年月日、職業、住所、本籍を決めよう。

(2)起訴状朗読

資料a (略) 参照

(3)黙秘権告知・罪状認否**(4)冒頭陳述 (検察側・弁護側)**

資料b 資料c (略) 参照

ワーク5

検察側・弁護側双方が主張する「刑を決める上でポイント」を考えよう。

3. 証拠調べ手続き**(1)検察側提出証拠**

凶器、現場見取図
(被害者雇用主)

(2)弁護側提出証拠

(目撃者 (共犯者)、被告人妹)

ワーク6

犯罪事実を証明するためには、どのような証拠が必要か考えてみよう。

4. 証人尋問・被告人質問**ワーク7**

証人尋問・被告人質問の内容を考えてみよう。

(前回のまとめ)

- ・雇用主は、被害者を少年院 (少年刑務所?) 退院 (出所?) 後雇用している
→被害者は、職場では立ち直りを見せており、とくに問題はなかった。
- ・目撃者 (共犯者) は、被告人と被害者の最後のやり取りを聞いている
→被害者は、最後まで反省していなかった。
- ・被告人の妹は、以前の事件から被告人が立ち直る過程を見ている。
→人生に絶望した状態から、仕事に復帰するまでの被告人の苦勞を知っている。

→検察側からどのような質問をしていくか? 弁護側からはどのような質問をしていくか?

グループワーク

雇用主に対する検察官・弁護人・裁判所の質問

目撃者に対する検察官・弁護人・裁判所の質問

被告人妹に対する検察官・弁護人・裁判所の質問

被告人に対する検察官・弁護人・裁判所の質問

→グループに分かれて、分担された質問を決める

- ・できるだけ一問一答で。
- ・質問に対する回答も決める。
- ・その質問によって何を明らかにするか、被告人の回答で何を語らせるか、その意図を明確にする。

→グループの代表者は、質問内容を一問一答の形式に word 等のファイルにまとめた上で、1月25日 (水) 17時まで、平野までメールに添付して送信する。

→ほぼそのままの形で台本に組み込み、1月27日 (金) の授業で全員に配付する。そこで、検討を行う。

資料 2

市民生活と地域社会 I 受講生アンケート 2012 年 1 月 27 日

*回答集計結果は、今春発刊予定の学内誌「21 世紀教育フォーラム」に掲載予定です。

あなたは、この講義を通じて、受講前と比べて、以下の点をどのようにとらえるようになったか、それぞれ記して下さい（○は一つずつ）

*「講義」には、受講要件の模擬裁判員裁判シナリオ作成活動を含みます。

1. 裁判員をつとめたいと思うようになった

①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③どちらともいえない ④どちらかといえばそう思わない ⑤そう思わない

2. 裁判員に選ばれると負担が大きいと思うようになった

①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③どちらともいえない ④どちらかといえばそう思わない ⑤そう思わない

3. 正義とは何かを考えるようになった

①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③どちらともいえない ④どちらかといえばそう思わない ⑤そう思わない

4. 被告人の処遇について考えるようになった

①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③どちらともいえない ④どちらかといえばそう思わない ⑤そう思わない

5. 他の人とのチームワークの中でコミュニケーションがうまくとれるようになった

①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③どちらともいえない ④どちらかといえばそう思わない ⑤そう思わない

6. 自分の言動に社会的責任を感じるようになった

①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③どちらともいえない ④どちらかといえばそう思わない ⑤そう思わない

7. 自分の人間性、社会性が向上したと感じるようになった

①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③どちらともいえない ④どちらかといえばそう思わない ⑤そう思わない

以上で質問は終了です。ご協力いただきありがとうございました。

資料 3

「市民生活と地域社会（Ⅰ）」受講生アンケート結果

(2012年1月27日実施、回答者16名)

■【Q1】裁判員をつとめたいと思うようになった <SA>

	全 体	そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらともい えない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
調 査 数	16	5	7	2	1	1
構成比率	100.0	31.3	43.8	12.5	6.3	6.3

■【Q2】裁判員に選ばれると負担が大きいと思うようになった <SA>

	全 体	そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらともい えない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
調 査 数	16	4	7	3	2	0
構成比率	100.0	25.0	43.8	18.8	12.5	0

■【Q3】正義とは何かを考えるようになった <SA>

	全 体	そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらともい えない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
調 査 数	16	5	8	2	0	1
構成比率	100.0	31.3	50.0	12.5	0	6.3

■【Q4】被告人の処遇について考えるようになった <SA>

	全 体	そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらともい えない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
調 査 数	16	11	5	0	0	0
構成比率	100.0	68.8	31.3	0	0	0

■【Q5】他の人とのチームワークの中でコミュニケーションがうまくとれるようになった <SA>

	全 体	そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらともい えない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
調 査 数	16	2	7	5	2	0
構成比率	100.0	12.5	43.8	31.3	12.5	0

■【Q6】自分の言動に社会的責任を感じるようになった <SA>

	全 体	そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらともい えない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
調 査 数	16	2	11	2	1	0
構成比率	100.0	12.5	68.8	12.5	6.3	0

■【Q7】自分の人間性、社会性が向上したと感じるようになった <SA>

	全 体	そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらともい えない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
調 査 数	16	3	8	3	1	1
構成比率	100.0	18.8	50.0	18.8	6.3	6.3